

特定行為研修制度の活用に取り組む管理者

訪問看護ステーションの管理者

医療法人恒貴会 訪問看護ステーション愛美園
所長 中島 由美子 さん

特定行為研修の修了者数

ろう孔管理関連、呼吸器（長期呼吸療法に係るもの）関連 2区分3行為 1名
ろう孔管理関連、創傷管理関連 2区分4行為 1名

地域のニーズと利用者のニーズに こたえるために



【施設の概要】

自施設は茨城県にある社会医療法人恒貴会の病院が設置主体の訪問看護ステーションです。看護師が10名所属し、利用者は約140名です。医療保険の利用者が6～7割と多く、医療依存度が高く、医療

的ケアの必要な小児にも訪問しています。同一法人のクリニックがかりつけの利用者が多いですが、その他のかかりつけ医は12か所、県外も含めた大学病院等からも指示をもらっています。

地域の医師の高齢化も進み、閉院もある状況です。地域の医療提供体制を見ると、医師の緊急時対応は一人体制で、医療依存度の高い利用者を見ている場合もありました。また、利用者側を見ても、医師が週に1回しか訪問しないケースでは褥瘡のデブリードマンができず、治りが遅延するなどの経験をしてきました。

このように、地域のニーズと利用者のニーズを考えて、特定行為研修が活用できるのではと思っていました。制度が検討されている段階から情報収集をして、制度創設と同時に最初の看護師を研修に派遣することにしました。

特定行為研修制度の 活用にむけたプランと対応

最初の派遣者を考えるときには、地域のパイオニア的な看護師になると考えていたので、後に続く人を引っ張っていき、また地域の医師等からの信頼も得ている看護師をと考えて人選しました。

組織として研修に送り出すために、法人内で特定行為研修のメリットや活用可能性を説明し、承認を得ました。そして、研修に出る前に、研修を受講する看護師や病院等とも話し、修了後はどういう役割を担うのかを決めて送り出しました。

研修は出勤扱いとし、実習中は勤務調整を行いました。研修機関が勤務との両立を考慮したプログラムを立案しているため、連続した実習は最長で5日間でした。研修に送り出すときに、研修と勤務の両立が大変では、という質問もよく受けますが、勤務調整は全然負担にならなかったです。研修中は加えて、e-ラーニングも集中して行える環境となるよう配慮しました。

修了後の活動開始に向け、この地域で初めての特定行為研修修了者なので、丁寧に周知活動を行いました。まずかかりつけ医の医師へ個別で説明をし、さらにそれ以外の医師へも、何を学んだか何ができるかをリーフレットにして周知活動をしました。医師のほか、診療所の事務職員やケアマネジャー会など関係者への周知も行いました。

実際に特定行為を始める際は、安全に安心して

実施できるための体制を整備しました。修了生が戻ってきて活動を始めるにあたり、最初に確認したのは、今加入している賠償責任保険で特定行為の実施がカバーできるか、ということです。修了者も、行く前より戻ってきてからの方が、医療安全について慎重になっています。

そして医師との協働体制の構築です。最初は見学、次は同行で実施など段階を踏んで実施できるよう、医師へ依頼・調整を行いました。その後のバックアップも医師との関係性が大切だと思います。さらに遠隔地の医師の指示でも行えるように、医師へ相談・調整を行いました。その際には、特定行為の実施の実績や安全体制の説明を行い、実際の手技の確認などをしていただき、実施に結び付けていきました。

修了者の活動の実際と効果、今後のビジョン

修了者は通常の訪問看護に加えて、別枠で特定行為の必要な利用者への訪問を行っています。特定行為を実施するだけでなく、関連して学びを得ているので、観察するポイントや管理についてもしっかり押さえているので、緊急事態になる前に

防げています。利用者と医師からはよい反応が返ってきており、「やはり必要だ」と実感しています。例えば、腸痙のあるお子さんは交換のために遠方まで出かける必要があり、緊急時でも痛みを我慢して3時間かけて受診していましたが、今では緊急時に在宅で交換できるようになりました。

また、共通科目でのフィジカルアセスメントなどの学びを訪問看護ステーションのスタッフや地域の看護師にも波及して、全体的な質の向上を図っていきたいと考えています。医療的ケアが多い利用者には、特定行為研修の共通科目で学ぶ内容が非常に必要に役立っています。修了者には地域での研修なども継続してやってほしいと思っています。

また、医療の変化に伴って、訪問看護ステーションも情報や知識をアップデートすることが必須です。そこへの役割も期待しています。加えて、修了者は他の看護師や看護学生のロールモデルになっています。地域のニーズに応じてステーションも変化し続けていく必要があると思っており、特定行為修了者には期待をしています。

2019年12月時点

慢性期病院の管理者

医療法人社団 三喜会 鶴巻温泉病院
看護部長 小澤 美紀 さん

特定行為研修の修了者数

- ①7区分14行為修了者3名、②8区分15行為修了者1名、③9区分16行為修了者1名
【9区分16行為】

呼吸器（人工呼吸療法に係るもの）関連、呼吸器（長期呼吸療法に係るもの）関連、栄養に係るカテーテル管理（中心静脈カテーテル管理）関連、栄養に係るカテーテル管理（末梢留置型中心静脈注射用カテーテル管理）関連、創傷管理関連、栄養及び水分管理に係る薬剤投与関連、感染に係る薬剤投与関連、血糖コントロールに係る薬剤投与関連、精神及び神経症状に係る薬剤投与関連

※①は、上記のうち栄養に係るカテーテル管理2区分は除く。

②は、上記のうち栄養に係るカテーテル管理（末梢留置型中心静脈注射用カテーテル管理）関連1区分は除く

医師不足による課題解決と看護のレベルアップの必要性

当院は、一般・療養病床505床、介護医療院52床の慢性期を中心とした病院です。回復期の

リハビリから看取りの緩和ケア、そして、療養病棟や難病患者の受け入れや地域連携など、さまざまな慢性期の患者に対応した医療を提供しています。

特定行為研修の活用の背景には、医師不足への

対応と看護職の力の底上げを図りたいという狙いがありました。当院は、医師一人当たりの受持ち患者数が多く、定期の気管カニューレの交換が、他患の急変等で翌日に延期になったり、褥瘡処置がスムーズに行えない状況がありました。また、慢性期の患者への看護では、異常の早期発見や予防を行うことがとても重要になります。看護師が、医師の指示のとおり「熱が出たから解熱剤を使う」で終わらずに、状態悪化などによって急性期病院へ転院するような事態に至らぬよう、どのような状態の変化が起きているのか立ち止まって考え、対応できる力を養う必要があると感じていました。

特定行為研修制度の活用に向けたプランと対応

私は、平成24年度に看護師特定行為・業務試行事業に参加しましたので、特定行為研修を通して身につく知識や技術が、当院の医師不足により起きている課題の解決や看護のレベルアップにつながると確信していました。院長も制度に理解があり、組織内での研修派遣の決定や研修予算の確保はとてもスムーズに進みました。

修了者には、看護のロールモデルとしての活動を期待しています。このため、厳しい研修を乗り切れるかはもちろんですが、日頃からきちんと看護の考えをもって実践し、周囲から信頼を得ている人であることを重要視して、研修に派遣する看護師を決めました。修了者は院内の関係者と調整しながら、新たに活動を作っていく能力も必要です。人選はとても重要だと思っています。

とはいえ、最初の1人目は、活用がいま一つ進みませんでした。このため、2人目からは組織的な働きかけを行ない、活動を作っていけるよう看護副部長や科長等の役職者に受講してもらっています。また、私自身が試行事業から戻った当初も、制度を作っている最中で、自分を含め周囲も活用方法について戸惑い、理解を得られず、大変辛い想いをしました。この経験から、制度の活用

を進めるには、研修の派遣は複数にすることも必要だと思いました。複数にすることで、修了者同士で相談や話し合い、活動の提案や院内での系統だった活動がしやすくなる効果があると思います。

少しずつ見えてきた 特定行為研修制度の活用成果

現在、修了者は各病棟等の管理者として、臨床推論等を活用して病棟スタッフや管理夜勤での院内巡回時の相談対応、また、院外では研修講師の担当などを行っています。さらに、修了者チームを編成し、決まった曜日に気管カニューレの定期交換や褥瘡のラウンドに回り、処置や病棟看護師などへの指導助言などを行うチームでの活動をしています。医師不足のため患者を待たせてしまう状況がありましたが、この活動により、患者の入院生活のリズムに応じたスムーズな処置ができています。

また、当院は発語ができない患者が多く、修了者チームの活動を患者の家族が評価してくれます。看護師は、患者の手を握り声をかけながら、丁寧に処置を行っています。付き添っているご家族に対して状況などを分かりやすく説明しながら、特定行為を行いますので、家族が「この人にこれも聞いてみようかな」と信頼され、関係を築いているケースもあります。

まだ、評価途上ですが、院内の他の看護師も修了者から影響を受けて、力がレベルアップしてきていると感じています。今、6人目を派遣していますが、修了者の活動を見て「凄い。自分も目指したい」と言ってくれたスタッフです。他にもそんな声がちらほら聞こえてきていますので、とてもうれしい循環です。今後は、各病棟に1人の修了者を配置することが目標です。更なる看護のレベルアップを図っていきたいと思っています。



2019年11月時点